朝日新聞厚生文化事業団

本部（東京）
〒104-8011　東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7446　FAX 03-5565-1643

大阪事務所
〒530-8211　大阪市北区中之島2-3-18
TEL 06-6201-8008　FAX 06-6231-3004

2022年度

児童養護施設・里親家庭等
進学応援金

事業
報告書

朝日新聞厚生文化事業団

協賛：公益財団法人 原田積善会

御　礼

児童養護施設、里親家庭などから大学・短期大学・専門学校に進学する学生を経済的に支援する進学応援金は、2008年度のスタートから約400人に返還不要の奨学金を届けてきました。

さまざまな奨学金がある中で、この進学応援金の特徴は、みなさまのご寄付やお気持ちを学生のみなさん（応援生）に届け、彼ら彼女らとともに、次の世代のためにアクションを起こすことにあります。

20年度から本格的に着手した「ぴあ活動」は、日増しに充実し、おかげをもちまして多方面からご注目をいただいております。

この報告書の中では、今年もこの「ぴあ活動」について掲載させていただきました。みなさまのご支援をもとに学び、挑戦する応援生の様子をご報告できれば幸いです。

23年4月に22人の新入生が加わり、4月末時点の応援生は、66人です。

これからも彼ら彼女らとともに歩みを進めてまいります。

本応援金プロジェクトの糧は、みなさまのご寄付です。ご厚志をいただきましたみなさまに、心からお礼を申し上げます。

また、応援生の思いに共感し、多くの専門家や養育関係者の方々が活動を支えてくださっていることにも、改めて感謝を申し上げます。

※“ぴあ”は英語のPeerで仲間を意味します。

朝日新聞厚生文化事業団

進学応援金事業

奨学金事業：奨学金給付、応援生の生活全般の相談に対応する「応援LINE」

ぴ あ 活 動：ぴあ応援フェス（P5～6に掲載）の開催、ぴあ応援ラジオ（P7に掲載）の作成、
ぴあ応援ブック（P7に掲載）の発信、個別面談や少人数の交流会によるフォローアップなど

進学応援金は、みなさまからのご寄付と山岡こども応援資金などを原資にしています。

2022年度の給付報告

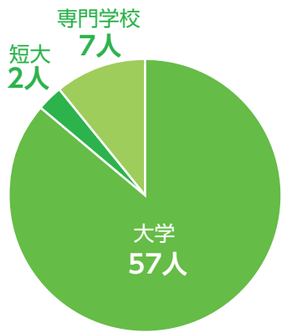
2022年度は、新入生22人、在学生44人の計66人に総額2320万円を送りました。在籍する学校の種別は大学57人、短期大学2人、専門学校7人です。

専攻は「看護・医療」が最多の10人。「工学」「福祉」がともに9人などと続きます。

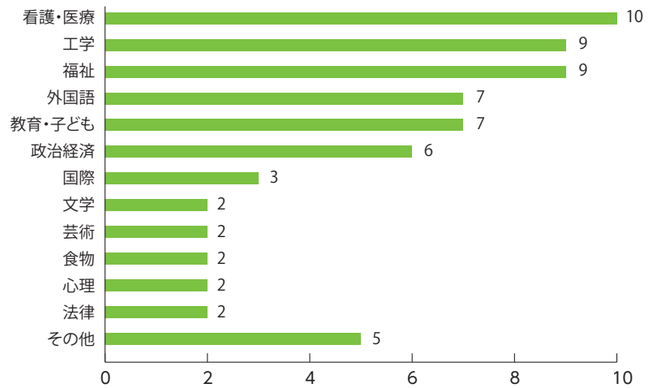
この他に、今春に卒業したのは18人で、進路は教師、地方公務員、看護、IT、保育、ハウスメーカー、スポーツ関連などとなっています。

また、中途退学が1人、体調不良で休学が1人でした。

学校種別と人数



専攻内容と人数



人数などは2023年4月1日時点

ご寄付について

当事業を多くの方に知っていただくため、クラウドファンディングサイト「READYFOR」を利用し、支援を呼びかけました。サイトを通じたご寄付は目標とした400万円を大きく上回る576万1000円（276件）。また、朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付も360万379円（52件）いただきました。みなさまのご理解とご協力に感謝し、厚くお礼申し上げます。内訳は下記の通りです。

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
READYFOR（クラウドファンディング）	276件	5,761,000円
朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付	52件	3,600,379円
合計	**328件**	**9,361,379円**

みんなの役に立ちたい

応援金のおかげで学費や生活に困ることがなく、自分のやりたいことに向かって全力で進めています。いつか自分が社会に出て、多くの人の役に立てるように、たくさん勉強し、いろいろなことを経験したいと思っています。いつも私たちの夢を応援し、支えてくださり、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。（20歳）

夢はIT企業への就職

私は現在、IT企業への入社を目指し、就職活動を始めました。また、大学の研究室でも本格的にIT分野を学び始めています。このような挑戦ができる環境を整えてくださり、本当にありがとうございます。ご支援してくださるみなさまとの縁を大切にしながら、今後も夢の実現に向けて、挑戦し続けていきたいと思っています。（20歳）

社会人への道が楽しみ

応援してくださるみなさまのおかげで、安心して大学に通うことができています。心の底から感謝しています。将来はホテル業への就職を考えており、就活も始めました。社会人への歯車が少しずつ動き出していて、楽しみで仕方ありません。みなさまのように社会貢献できる立派な大人になれるよう、日々精進していきたいと思っています。（20歳）

寄付で大学進学できた

大学に進むにはお金がかかり、施設などで暮らす子どもたちは敬遠してしまいがちです。しかし、私は今、ご寄付によって、進学を諦めることなく、大学に通えています。本当にありがとうございます。みなさまの思いをいただき、より勉学に精進していきたいと思っています。まだ具体的には未定ですが、将来はスポーツやデザイン関係の仕事に就きたいと考えています。（20歳）

国際交流に興味を抱く

応援金のおかげで大学の勉強に集中できています。留学を通じ、日本の素晴らしさに気づきました。日本の魅力を海外に発信したり、訪日外国人と関わったりする仕事に興味を持ち始めています。みなさまに支えていただいていることを忘れずに、インターンシップや業界研究を通じ、自分にはどのような就職先が向いているかをはっきりさせていきたいと考えています。（20歳）

地元に学校を創りたい

みなさまのおかげで、自分の夢に近づくため時間とお金を費やすことができています。今、とても幸せです。大学卒業後、特別支援学校の講師になるか、フリースクールで働こうか悩んでいます。私の夢は自分の地元に学校を創ることです。そのためにどちらが望ましいか、考えている最中です。今後もご支援くださるみなさまへの感謝を忘れずに生きていきます。（21歳）

最高の4年間過ごせた

みなさまに応援していただき、無事に大学4年間を終えることができました。振り返ると、学年が上がるごとに学びが充実し、最高の4年間を過ごせたと感じています。みなさまのおかげです。これから社会人になりますが、日々精進していきたいと思っています。改めて、4年間本当にありがとうございました。社会人1年目は地元で講師として働く予定です。（22歳）

大学や短期大学、専門学校で学ぶ　私たちから寄付者の皆さんへ！

ご寄付と応援
ありがとうございます！

支援の思を忘れず励む

私は今、大学4年生で、今春卒業することになりました。いいことも悪いこともあり、毎年、退学の二文字が頭をよぎる4年間でした。ご支援いただいたみなさま、そして、頑張っている仲間がいなければ、退学を選ばざるを得なかったと思っています。いただいたご思を忘れず、私なりに返していけるよう励んでいきます。本当にありがとうございました。（22歳）

児童福祉司の夢叶えた

みなさまのご寄付のおかげで、夢だった児童福祉司の職に就けます。「自分の夢を自分で叶える」という経験ができました。現在は社会福祉士の資格取得に向けて奮闘しています。さまざまな形で応援してくださったみなさまのおかげです。本当にありがとうございました。これからは社会人として輝き、輝ける子どもたちの応援をしていきたいと思っています。（21歳）

看護師目指して頑張る

みなさまにも生活がある中で、ご支援をいただき、言葉で伝えきれないほど感謝しております。私は看護師を目指しています。正直、自分が看護師に向いているか、不安に感じています。医療は日々発展しており、看護師になってからも勉強は必要だと言われています。まずは看護師になれるよう、これからも頑張っていきたいと思っています。（21歳）

※年齢は2023年3月末時点。今春の卒業生含む

特集

後輩たちへ「希望を持って」

応援金を受けて大学などに通う応援生有志は2022年度、児童養護施設や里親家庭で暮らす中高生らを対象に、さまざまな企画に取り組みました。こうした子どもたちは親による虐待を受けたり、経済的に苦しんでいたりするケースが少なくありません。「大学に進みたいけど、諦めるしかないのかな」「奨学金の情報はどうやって集めればいいのだろう」。かつて自分たちが経験したつらい思いを「後輩」たちにはさせたくない――。そんな思いから多くの情報発信を続けました。

ぴあ応援フェス（2022年10月8、9日）

応援生有志約40人と朝日新聞厚生文化事業団は2022年10月8、9日、全国の施設や里親家庭で暮らす中高生に就職や進学などの情報を届けようと、「ぴあ応援フェス」を初めて開催しました。「ぴあ」は英語で「仲間」を意味します。コロナ禍のため、朝日新聞東京本社の読者ホールを配信会場に、オンラインで実施。2日間で延べ約200人が参加し、さまざまな質問や疑問、悩みに応援生らが応えました。

OBやOGら多彩な講師が登場

応援生によるピアノ演奏が
フェスのオープニングを彩った

「自分たちが中高生だった頃、進学や就職などの情報を集めるのに苦労した。悩みを共有できる仲間も少なかった」――。自らの体験を踏まえ、応援生有志が情報発信を始めたのはそんな思いからです。

2021年秋にはオンラインのセミナーを開催。施設出身のアーティストらが講師になり、約100人の子どもたちに熱いメッセージを届けました。セミナー後、参加者からは「奨学金の説明を丁寧にしてくれた」「講師や応援生がしっかりと過去と向き合い、素晴らしい話をしてくれた」といった声が寄せられました。手応えを感じた応援生は「さらに情報発信をしていきたい」とフェスを企画。さまざまな分野で活躍しているOB・OGや団体などに協力を仰ぎ、準備を進めてきました。

応援生は「一方的な情報発信ではなく、中高生にも自由に思いを語ってもらいたい」と双方向のコミュニケーションを目指しました。ただ、オンラインとはいえ、名前や顔を出すことにためらいを感じる子どもたちも少なくありません。そこで考えたのが、ゲームなどで若い世代にはなじみの深い「アバター」を用いることでした。

フェスを運営する応援生。中高生は思い思いの
アバターで参加した

アバターとは仮想空間上の自分自身の「分身」のことです。デザインを学ぶ応援生が中心となり、アニメ風のアバターを約40体制作。これには「なりたい自分を考えるきっかけにしてほしい」という願いも込められています。趣旨に賛同した企業がアバター運用のアプリを無償で提供。こうして、お気に入りのアバターを選んだ中高生が、安心してフェスに参加できる環境を整えました。

参加者を募るため、応援生は冊子「ぴあ応援ブック」を作ったり、YouTubeのチャンネル「ぴあ応援ラジオ」にフェスを告知する音声動画を投稿したり。また、里親の全国組織なども賛同して参加を呼びかけてくれました。事業団職員も600カ所を超える各地の施設に電話でPR。ただ、「中学生にスマホは持たせていない」「子どもだけでのパソコン使用は認めていない」「そもそもWi-Fi環境が整っていない」といった施設も少なくなく、参加者集めは苦労の連続でした。応援生らは改めて「施設で暮らす子どもらに必要な情報を伝えることの難しさ」を痛感します。こうした点をどのようにクリアしていくかは、今後の課題です。

応援生有志が中心になり、企画から運営までを担当した

50以上のプログラムを用意して迎えた2日間のフェスには、それでも延べ約200人もの中高生などが参加。オープニングでは、里親家庭出身の大学生ひなさんが、素敵なピアノ演奏を披露しました。

施設や里親もっと知ってほしい

その後、参加者は就職や進学、施設を出た後の一人暮らしなど、テーマごとに分かれ、講師の話に耳を傾けたり、抱えている悩みなどを応援生を交えて話し合ったりしました。職業についてのプログラムには、今回も施設などで暮らした経験のあるOB・OGらが講師として登場。看護師やスポーツ選手、お笑い芸人、ミュージシャン、弁護士、教員、政治家、起業家・経営者……と顔ぶれは多彩です。講師の誰もが、中高生に寄り添うように自身の過去を振り返り、夢を諦めないことの大切さや、励ましの言葉などを語りました。

参加者からはフェスの期間中、チャットでも次々にメッセージが寄せられました。「つらいときは今日もらった言葉を胸に頑張ろう」（14歳）、「勇気をもらえた」（17歳）、「ほかの施設の子たちと交流できてとてもよかった」（15歳）、「ずっと話していたい」（14歳）――。フェスの最後、「みなさんには明るい未来があります。このフェスが夢や希望を持つきっかけとなれば嬉しく思います」と応援生の一人が語り、企画は幕を閉じました。

施設や里親家庭で暮らす中高生の中には「差別的な目で見られる」「偏見を持たれている」「学校で施設のことを話しづらい」といった切ない思いを抱いている子どもも少なくありません。そもそも施設や里親について、まだ世間では十分に知られておらず、誤解や色眼鏡を恐れ、そうした環境で過ごしていること自体を周囲に言えずに苦しんでいる中高生もいます。

フェスを報告した「ぴあ応援ブック」（2023年冬号）の誌面で、応援生の一人は「自分自身が施設出身であることなどを打ち明けた際に、そのことをしっかりと受け止め、これまで通りに接してくれる人とこそ、今後も良い関係を続けられるのではないかと思う」と綴っています。別の応援生も「友人やバイト先の人など、まず身近な人たちに施設のことを話して正しく理解してもらえるように努めている。一番は環境にとらわれず自分を大切にすること」と書きました。

かつての自分たちと同じだからこそ、痛みがわかる、必要なことも理解できる――。そう信じる応援生たちは、これからも「後輩」たちに情報を発信し続けます。同時に、施設や里親家庭、そこで暮らす子どもたちのことをもっと知ってもらえる取り組みも、模索していくつもりです。

施設や里親家庭で暮らす中高生らに役立つ情報を届けたいと、応援生有志は2022年1月、YouTubeにチャンネル「ぴあ応援ラジオ」を開設しました。同年3月には冊子「ぴあ応援ブック」も創刊。いずれも進学や奨学金、学生生活などについての情報を発信しています。自分たちが同じ経験をしてきたからこそ「後輩」に伝えられるものがある。そう考え、継続して内容を更新。一般の人たちに施設や里親家庭の「リアル」を知ってほしいという願いもあります。

ぴあ応援ラジオ（2022年1月～）

応援生がリアルな体験を発信している
「ぴあ応援ラジオ」の画面

取り組みは「NHK福祉情報サイト ハートネット」（2022年06月28日公開）でも取り上げられた（同サイトより）

ぴあ応援ラジオは2022年1月にスタート。初回のラジオでは、大学1年と4年（いずれも当時、以下同）の応援生がパーソナリティーを務め、3年と4年の応援生をゲストに迎えました。画面に顔は出さず、かわいい男女のイラストを映した、音声だけの動画です。約19分の番組では、ゲストの2人が生い立ちや進学時にどのように奨学金を獲得したかなどについてトーク。企画から収録、編集まで、すべて応援生有志が手がけました。

以来、「大学生活」（2月）、「つらかった時、どうした?」（3月）、「社会人って何してる?」（5月）、「大学ってどんな感じ?」（6月）、「頼ることは必要?」（7月）といったテーマを設け、各地の応援生らがゲストで出演。自らの経験を飾らない言葉で視聴者に語りかけました。

決して楽とはいえない学生生活にコロナ禍が重なり、「ちゃんと学校にも行けず、人と会えず、人間関係が希薄になった」といった悩みもポロリ。ぴあ応援フェスの告知や参加者募集などについても積極的に発信しました。

YouTubeチャンネル「ぴあ応援ラジオ」のアドレス
https://www.youtube.com/channel/UC6YZfSNpmxaf4yKYDaPT4gg/featured

ぴあ応援ブック（2022年3月～）

応援生が自らの経験を踏まえ、
中高生らに情報発信

ぴあ応援ブックの創刊は2022年3月です。A4判カラーで8ページ。創刊号では「大学生の1日のスケジュール&1カ月の収支」をイラストやグラフを交えて紹介。また、作業療法士になる夢を叶えた応援生OGへのインタビューなども掲載しました。この時、中心になって制作したのは応援生有志5人です。

その後の号でも、サークルやアルバイト事情、奨学金の案内、悩んだ時の相談先といった進学を目指すなら誰もが知っておきたい情報を掲載。加えて、「施設や里親家庭での体験談」（第2号）、「里親家庭での通称名と本名」（第3号）など、主な読者の中高生と同じ境遇を経験したからこそ生み出された企画も誌面を飾っています。2023年冬の第4号ではぴあ応援フェスを特集。「社会的養護が認知されてほしい。普通になってほしい」といった参加者の声を紹介しました。「後輩」たちの参考になるのはもちろん、施設や里親家庭について社会の理解が深まることも願いです。

ぴあ応援ブックがダウンロードできる朝日新聞厚生文化事業団のホームページ
https://www.asahi-welfare.or.jp/archives/14825395

2023年度

私たちの新たなプロジェクト

施設や里親家庭で育った応援生、朝日新聞厚生文化事業団、関係者らが手を携え、2023年度も新たなプロジェクトが始動しています。「巣立ちの権利ノート」作成、「奨学金検索サイト・奨学金団体ネットワーク」構築、「訪問型セミナー」開催の三つ。いずれも応援生の切実な声などを踏まえて企画されたものです。あらましをご紹介します。

1 「巣立ちの権利ノート」作成

大学進学や就職などにより、社会的養護で暮らす子どもたちもいつかは施設や里親家庭を巣立っていきます。応援生は「退所が近づくにつれ、先の見えない不安が大きくなった」「将来に向けた情報が得られにくいこともあった」とその時期を振り返りました。こうした経験から「自立の準備」に焦点をあてたガイドブック「巣立ちの権利ノート」（仮称）を初めて作成すると決めました。

現在大学に通う応援生に加え、施設や里親の全国の協議会を代表する方や大学教授、弁護士ら計12人で制作委員会を結成。構成や内容などについての検討を重ねています。

具体的には「施設を出た後、困った時にはどこに相談すればいいか?」「名乗ってきた里親の苗字は使い続けられるのか?」といった疑問や不安について、子どもの権利の視点からわかりやすく解説する予定。2023年度中の完成を目指し、全国の施設、里親家庭、ファミリーホームで暮らす高校生（一部中学生含む）らに無料で届ける計画です。

2 「奨学金検索サイト・奨学金団体ネットワーク」構築

施設・里親家庭の子どもたちや出身者は、経済的に厳しい状況におかれている場合も少なくありません。彼、彼女らにとって、奨学金を得られるか否かは、日々の学びや活動時間、進学の可能性などに大きく関わってきます。一方で、応援生からは「奨学金の情報を集めるのが大変だった」という声が多く聞かれます。こうした課題の解決に向け、応援生と事業団は現在、施設職員や里親らを対象に、奨学金の情報を検索できるサイトの立ち上げを目指しています。

また、すでに奨学金給付事業などを行っている団体に、ネットワークを組んでもらうための枠組み作りも準備中。賛同した団体と連携し、新たに設けるサイト上で、一緒になって奨学金の情報などを発信していく計画です。団体間での意見交換会なども行い、支援の輪をさらに広げたいとも考えています。

いずれの取り組みも2023年度中のスタートを目指しています。

3 進学・奨学金情報の「訪問型セミナー」開催

様々な団体による経済的支援策の拡充を受けて、近年、施設や里親家庭で育った子どもたちの進学へハードルは下がりつつあります。とはいえ、まだ一般的とは言えないのが現状。応援生からも「周りに進学したモデルになる人が少なかった」といった声が上がっています。こうした背景を踏まえて企画されたのが、訪問型セミナーです。

施設職員や里親の集いに、応援生と奨学金アドバイザーらが対面・オンラインで参加。体験談のほか、最新の奨学金情報などを紹介し、質問にも応じます。今秋～2024年初旬の開催を目指して準備を進めています。

新応援生に決まった子どもたちの横顔

2022年度は新たに22人の新入生に進学応援金を送ると決めました。受験の時期の様子や意気込みなどを紹介します。また、クラウドファンディングサイト「READYFOR」を通じ、応援金の原資となるご寄付をいただいた方の支援の声も、一部掲載いたします。

Aさん　「仕事を通じ人を支えたい」

2歳で母を亡くしたAさんは、祖父母の家で暮らしていました。小学生の頃、その祖母も他界。児童養護施設に入所しました。中学時代には自身が大病を患います。入院生活の中で、人と支えあうことの大切さを感じたといいます。「将来は仕事を通して人を支えたい」。そんな思いを胸に、勉強に励んでいます。

Bさん　「憧れの職に就きたい」

幼い頃から暇さえあれば本を読んでいたというBさん。学校では教科書まで読み込むほどの本の虫でした。里親家庭で暮らし、事情によって児童養護施設に移りました。高校では生徒会や部活動でも活躍。「ずっと憧れていた職業があります」といい、その夢の実現に向けて進学を希望しています。

Cさん　「里親制度知ってほしい」

Cさんは0歳で乳児院に入所し、児童養護施設を経て里親家庭で暮らしています。家族と離れた子どもの多くが児童養護施設で過ごす日本の現状に、問題意識を持っているそうです。「里親制度が広く認知され、より良くなってほしい」との願いから、進学後は「ぴあ活動」を通じ、社会に発信したいと考えています。

Dさん　「社会貢献できる大人に」

親から10年以上にわたって虐待され続けてきたDさん。家庭から逃れるために苦労を重ねてきました。将来について、まだ期待と不安を併せ持っているそうです。「私を自由の身にしてくれた人たちのために、社会に貢献できるような大人になりたい」と思いの丈を明かしてくれました。

ご寄付いただいた方からのメッセージ

勉学に励もうとされるその意気が、本当に素晴らしいです。夢を実現させるため、たくさんの支援を遠慮なく受けて、自分自身の人生を生きていかれることを祈ります。

教育への投資が一番成果が期待できると信じています。10年後、20年後、きっと彼らが社会を、そして私を支えてくれると思っています。事業団やOB・OGの方も、応援される学生さんも、頑張って下さい。

些少ですが、今年も応援させていただきます。ご自身が有意義だと感じられる分野で活躍されることをお祈りいたします。人生はまだまだこれからです。私も一緒に頑張りたいと思います。

世の中にはみなさんのことを気にかけている人がたくさんいます。だからどうか自信を持って、自分のために生きていってください。わずかですが応援させていただきます。

社会にはみなさんを応援している人がいます。苦しい時には一人で抱えず、人を頼ってください。それは弱さではありません。必ず力になってくれる人がいるので、頑張り過ぎないようにして下さい。

親や周囲の大人のせいで受けるべき愛情や庇護が得られなかった子どもたちに、ほんの少しですが寄付いたします。学ぶことを楽しんでほしいし、その後にもつなげていただきたいです。

※メッセージは趣旨を損なわない範囲で一部編集しています

ーご支援・ご声援をありがとうございましたー

2022年度
児童養護施設・里親家庭等
進学応援金 事業報告書

2023年6月15日発行
発行者　社会福祉法人 朝日新聞厚生文化事業団
執筆協力　河井　健
デザイン・イラスト　かえるぐみ